

中世後期社会を考える

2011/7/2 歴史学入門講座 久留島典子

はじめに

遅塚忠躬『史学概論』を読んで

1. 「中世後期社会を考える」という枠組み

一国史（国民国家の歴史）とそれを前提とした時代区分の枠組み
事件史と構造史

2. 自身の構造史的把握の試みとその問題点

「甲賀郡中惣」のとらえ方を事例として

現代とは連続しない「中世」認識 時代区分論の変化

「在地」という視点 全体史志向の必要性

3. 「中世」認識の変化 時代区分論の流れ

「現代」としての「近世」 戦前

「日本近世史の自立」による中世と近世の断絶 戦後

現代につながる中世後期という見方 80年代半ば、中近世移行論の登場

藤木久志「自力の村」論、勝俣鎮夫「村・町制」論

4. 中世後期社会の二つの動向の提起と問題点

「統合の運動」

「帰属の一元化」

「統合」・「帰属」という表現でよかったのか？

一元化ではなく、実は多元化していったのではないか？

〔史料を読む〕史料1～史料4

〔歴史学を学ぶ上での私の留意点〕

おわりに

全体史の試みの必要性

細分化の傾向 政治史、制度史、村落史、文化史・・・

村落史と政治史の接合 全体史への課題

天皇・将軍をどう位置づけるかという自身の課題

〔参考文献〕

- 朝尾直弘『日本近世史の自立』校倉書房、1988年
- 網野善彦『「日本」とは何か』講談社、講談社学術文庫、2008年（初出2000年）
- 安良城盛昭「太閤検地の歴史的前提」『歴史学研究』163・164号、1953年
- 池 享『日本中近世移行論』同成社、2010年
- 池上裕子『戦国時代社会構造の研究』校倉書房、1999年
- 石井進『中世史を考える 社会論・史料論・都市論』校倉書房、1991年
- 石母田正『中世政治社会思想 上』解説、(日本思想大系21)、岩波書店、1972年
- 勝俣鎮夫『戦国時代論』岩波書店、1996年
- 岸本美緒「時代区分の方法 総論；時代区分論の現在」歴史学研究会編『現代歴史学の成果と課題 歴史学における方法的転回』青木書店、2002年
- 久留島典子「日本前近代史の時代区分 十五・十七世紀の社会変動」同上書
- 同『一揆と戦国大名』講談社、講談社学術文庫、2009年（初出2001年）
- 同「中世後期の社会動向 荘園制と村町制」、『日本史研究』572、2010年
- 遅塚忠躬『史学概論』東京大学出版会、2010年
- 二木謙一『中世武家儀礼の研究』吉川弘文館、1985年
- 藤木久志『戦国の作法』平凡社ライブラリー、1998年、（初出1987年）
- 村井章介『中世倭人伝』岩波新書、岩波書店、1993年